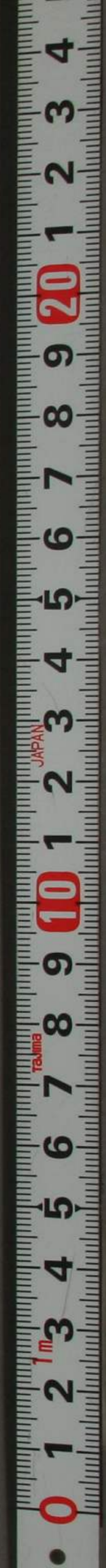




歙  
 野  
 路  
 廼  
 玉  
 川  
 前篇  
 三

遠  
 275  
 3



遠門  
第 九 卷  
三

本清

復讐言野路の玉川卷之三

滄海堂主人編述

橋邊の夜嵐

再説浮洲の岩石門と子分二個の悪漢ハ既

淀舟の閨諍より環山力右衛門が爲よ水中に投入し

かあど命数のつれづれ所よや三個ともは牧方の養賣舟

は助けくも不慮も命と全に堤つゝひは登つまゝが

環山が上り岸は三個が所持の品く恙なく何れは是を

海堂主人  
永  
七  
世

天より与ふる所と濡る衣服と更めの京師とさうて多心  
 くる原来この岩右工門の博変とりのけく活業とせる悪漢  
 するが能金りあけの筋も何々二人の子分とさうて  
 今般ごごく浪花の津に至るも仕合せのてとて萬  
 端ごころよまらせむ甚不貞氣とて故郷又歸る折る登  
 舟の鬪諍は思ひがけり辛き目とあひ益々心樂しむ  
 斯る折る嵐山の花の盛るるはあまこ此ほどの気色  
 と直さんめ彼所とつくりとて老見の酒宴と催さめと下

差我よ来て渡月橋と渡らんとるれと此不圖も二人  
 の女子と見つけしは三個ひくく跡と追ひ女方は彼方  
 と尋ひしうども君羊集の中すて其行方と見しむひ残  
 と尋ひしうども君羊集の中すて其行方と見しむひ残  
 肌ぬれけ茶碗酒とまぐり飲てまぐりく時とらせが  
 此時とつひく環山は且那の機嫌と伺んと三軒茶屋  
 と趣々と三個の茶店の奥より簾ごしと見つけしは諸  
 渠奴も此所と徘徊すれば必らば兩人の娘とも隠せしと



浄土の三十一

けあさの  
 ぐー  
 あんげん  
 ちん  
 ちん

そんやあうの  
 せいんぬうぬ  
 ちん  
 ちん

山石門



里路の玉川三

ちんげんまも  
 カ右エ門がうづ  
 あらう  
 ちん

九良藏

相違あり。重く憎と環山くんと待て重なる遺恨ありし  
 知して吳人びと此所よまじく時刻とうりし。歸里と遅く  
 と伺ひる櫻さく遠山鳥のあざり尾のいも永く春の日  
 もつらつら山の端よ入る花のゆきさる入相の鐘うりくと音  
 つらつら何とも花見の幕とまあり。纏とたんとさかまに  
 家路よかへる心ちまんとるれ。西川屋の一群も秋時終よ盃  
 とおさめ席とくさづけ秋方と立つと友よびつら十鳥あり。  
 ちやや散るる花びくと袂よとめく家土産よ手折し櫻

乃一枝とカ右工門ハ打くげ。後邊よ添くあゆくと。臨川  
 寺の方よぞつらぬ跡見おくつら三人が笑壺よ入る何なり  
 と見まへし。余所よや渡人と耳よ口必らびぬるる合点と  
 手拭とめく面とつら。尻引くげ身とくめ畔道づらひよ  
 走里めくカ右工門ハ斯河人とい夢よたも知ざれば只市兵  
 衛が事のとめんら西川屋の人よ附そひて帷子が辻より  
 太茶よのり山内の方よ趣く折く月も朧夜の一村  
 繁る藪くげより。頬くむりよ面とかくせし二人の曲者刺刀

拔ひきりち前まへすすまじ下男しもをが携もへるも燈とう籠ろうをからり切き落おせば  
すすハハ盜賊とうぞくハハ追制おひそぎよよと大勢おほせの男女おんなささつつをを立周章たちあそびふふととああれれ  
主従しゆじゆハハこころろくく足あしととふふととめめ轉ころつつままろろびびつつ散ちりここよよ後あともも  
見みゆゆとと逃にげささりりりり。二人ふたりハハ刀かたなひひららりりカ右工門みぎくもんめめががけけて  
切きららるる心得こころえとと身みととううりり櫻さくらの枝えだとと傍かたわら辺へよよるるげげととくく  
手てををゆゆくく刀かたな拔ひくくあありりててううくくとと門かどとと打うちちああせせ何なに奴やつらられれがが  
斯いるる狼藉らうせき身みののややととままぬぬ強盜どうぼうめめとと二人ふたりとと對手あひてハハ切きああひひ  
打うちちああひひ右みぎハハ附入つひら壹人いちにんとと大袈裟おほげさハハ切きつつくくままがが呼よびびととぶぶりり

又倒たふささるる今壹人いまいちにんハハ此こ体ていハハ是こいいかかままいいどどとと逃にげ出でハハ脱だつしし  
いいややとと追おううけけらら真ま兩段りやうだんとと後うしろよりより斬きつつひひんんびびととるるハハ  
拍子あしハハ細ことと流ながままのの板橋いたはしハハ思おもひひつつままづづとと我われららがが真ま俯ふみ  
臥ふせせととふふししららりり是こハハ仕損しとんせせししとと腕うでつつととてて起おここええ  
ととるるハハとところころハハ窺うかがひひよよつつるる岩右工門いそぎもん柵しほめめひひ知しよよししとと後うしろ  
辺へよりより右みぎのの肩かたをを切きつつくく深手ふかてととひひららすす起おここええ刀かたなをを  
合あせせくく切きああららすすよよくくららんんとと臆おそ夜よるる面めん体てい恰さ好こう  
ままがが方かたろろハハ右みぎ右みぎ工門くもんるるれれがが欺あやしし討うちちととハハ比ひ真まととやや門かどをを

悪と所為と怒りの鋒をむくすどく切こみども右まわ  
 るを左より逃ぐる悪者立ちたり切ろくれば前後の對手  
 原来右の肩されと前又深くも切こまれしゆへ心矢猛と  
 く申れども要害の深手は腕されるまじり浮漂すことつひ  
 入く思宜うけてぞ切こむる哀まむべしゆへは猛と力士  
 るまもいとも悪黨ホラ謀計は落入終は妖野は空しくも消  
 めく露路の環山無計りくる事どもろろ岩右工門の打笑  
 ひ無益汝が腕立自慢返る其身の仇とるる因果は巡る

水車淀の川瀬は返報とうけく勝手は成佛せよと既  
 とめと刺んば折る向ふの方より足音せらく灯燈と  
 手は携へつ此方と望んで走來る形勢いと急るれば兩人  
 見つけらるると其すゝ打すてこそ遁ま去ぬ

○野外の朧月

盛るるる花の姿も散りて哀まよ見ゆる春の夕ぐれと  
 詠りし哥のころも今こよ思ひあはされて涙みそでと  
 絞るゆれの環山カ右工門が身あぞ有るる岩右工門の首



予各の三十一

里路の三十一



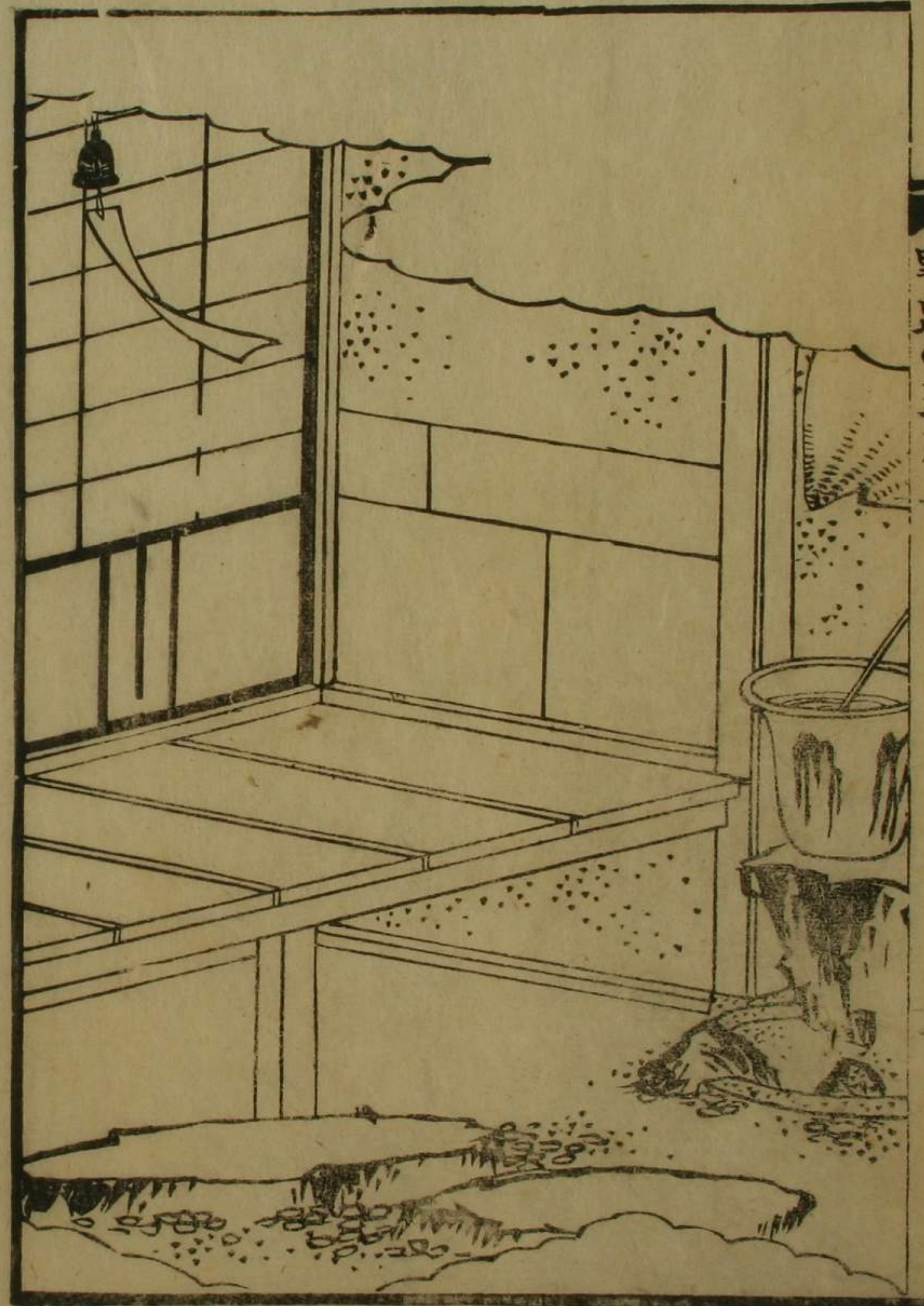
尾よく仕負せ既止めと刺及びてせましく走來る足  
 おとけ駭き其俣うて逃さりしが間もろく近づく灯燈の  
 主は是別人なり環山が忠義の門弟沖津浪龜之助之  
 裾は高く引くげ急ぐくは所は來くるを思ひ死  
 骸まことと踢き是は何変と灯燈と死骸は近づけ改つ  
 妖形勢まびつくりし扱こそくる事るりし遅くりし残念  
 やと無念の齒垢くひしめろぐ提る灯燈手をやくも  
 傍辺の松乃枝より煙袋より用意の妙茶とり出し流

その水を手拭ひとひに抱きおこし緊急齒をにわけ  
 つ辛ふと咽喉に入る一滴蘇生は用ひし茶のまろし息  
 ろとく力右工門沖津浪の耳は口よせ龜之助もく候  
 ぞ沖津浪こそ矢張りうると言声心は徹しやとくし  
 氣は眼を見ひくと龜之助もく有るうはく口よせや不覺  
 と取り敵の浮洲の岩右工門壹個の子分は手よりけり  
 つて後ま忍びく欺し討といふ声も細くと漸くとよける  
 数ヶ所の深手龜之助の種くと介抱しつ耳は口よせ先



二 教回おどろき比白く無念の齒ぐとてせども今さうも其  
 功もあられば此里の村長よとけ公よ訴うるよ。檢校乃官人  
 来つそく死骸と何くさめ堂六を拷問よりけくま一六悪  
 ト 事の次第とつづらうま白状又及ぶよその実否明白ふまば  
 死骸の則ち門弟の沖津浪又下され堂六と獄屋又引入  
 させ逃さりし二人の者を嚴しく穿鑿せしめしるも曾て其  
 行りさあまござりたり。偕又沖津浪の事久く濟しんば西  
 川屋の主人よ誘らひて死骸と野辺の畑とふし僧とむら

へ跡と弔らひ一七日も過ぬまば是より敵の有所と尋ひ  
 雙言と下りて七雲よ手向をやと其用意とあしつらま  
 つら思ふ中。師匠よの故郷よ妻子と残り置きしまば  
 此人よ告げしと敵と討んの道と一まづ本國王島よ下り  
 縁由とくま語り此人と助けし諸ともは敵は行術と  
 搜しめんと心と決し此事と西川屋の主人よりつり  
 法号とあませし位牌と懐し旅路の装ひととのへつ  
 九州さして下りり。偕ま岩右工門九郎藏の兩個



其夜より伏見の夜舟は打のり。暗は浪花の津より下り  
 ちりく。執りて京師の風聞とて合は堂六すくは召  
 とくま。拷問よりつて。悪事の始終を白状におまび其  
 罪科明白よりより公の詮議をびく草と分つ。如く  
 らん。此兩人は此は潜まりぐさ。岩右衛門の九郎藏  
 又對ひ今斯のごとく穿鑿をびくれば。以所は。最  
 危ふし。されば我の忍び中より一ヶ所。関東に趣くんとおのり。一  
 然るより。知て。本國多古島に壹個の妹あり。也

公より詮議あり。彼と也捕り拷問ゆらんも計らまは  
 此事甚ごさる。されば。你こそより。故郷より下り。鬼も角  
 も。妹と伴ひ何方も。忍むを。吟味を。い  
 や。矢さ死と避け。身と全くせん。と計り。若叶のさる  
 用ひ。大津の里。札の。過す。駕の。与四郎。とて。尋  
 尋の。来ま。我何國も。住所と。定め。彼所を。言ひ  
 越べ。と。語ま。九郎藏。実の。頼り  
 恚も。親分の。言の。通。計ら。心や。れ。思ひ

よと兼引こく人よ岩右工門も大ひは悦び是より一とく兩  
うのたま あけま  
 人の花の吾妻の道まどと雪のこ路と引こく夜を  
ひ つぎ りそ  
 日は次で急ごりり

復讐言野路の玉川巻の三終  
くさくさのト  
まごころ  
の三  
終

